Column

医療保険制度の一本化は？

前京都府国保連合会嘱託　　亀井　励

会社に勤めていた若い頃、医療保険についてまるで関心がありませんでした。当時は健康保険組合の被保険者だったわけですが、他にどんな種類の医療保険があるのか、保険料は安いのか高いのかなど何も知りませんでした。保険証というものを使う機会もほとんどなかったし、健康保険料は所得税や失業保険などいろいろ天引きされている中の一種として「引かれても仕方のないもの」で、中身など点検しようとも思っていませんでした。

それが、５０年後の今日までに、健保組合から始まって市町村国保、政府管掌保険、国保組合と４種類の医療保険の被保険者になり、数年後には後期高齢者医療制度まで５種類の保険を経験することになろうとは思いもよらないことでした。

その間、保険料を強く意識したのは市町村の国保、具体的にいえば京都市国保の被保険者になったときでした。それまでも会社を定年退職したあと、健保組合の継続被保険者になり、一年間の保険料を会社負担なしに一括納入していましたから「高いなあ」と感じていましたが、それどころではありません。年金生活の身には１回５万円以上の保険料納入は本当にこたえました。住民税や固定資産税などをはるかに上回る額でした。

医療費の一部負担については、これも１割負担の頃はあまり意識したことはなかったのですが、高齢化して保険証を使う機会が増えた頃に３割負担になったのはこたえています。

各種の医療保険を経験してきて思うことは、医療保険制度はやはり一本化するのがいい、ということです。困難な条件はわかりますが、医療弱者を中心に据えた一本化が、一日も早く実現することを願っています。

平成９年から１１年間に亘ってこの欄を担当し、６０余回、自分の思うままを書かせていただきました。このたび、京都府国保連合会を退職することになり、この欄の執筆もこれが最後になりました。長い間のご愛読ありがとうございました。